

寂兮寥兮

かたちもなく

© 1982
Printed in Japan

一九八二年六月三〇日 初版発行
一九八二年二月一五日 六版発行

著 者 大庭みな子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二
営 業 電話 〇三―四〇四―二二〇一
編 集 〇三―四〇四―八六一一
振替口座(東京) 〇一―〇八〇二

印刷 株式会社 暁印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

寂かたちもなく兮
寥かたちもなく兮

明かるい雪の畦道を野辺送りの行列が通って行った。あたり一面銀世界で、田の水だけが黒かった。乳色の柔らかな雲の間から、陽が洩れ、ときどき思い出したように白い雪の花びらが舞い落ちた。

四人の若い男が花嫁の輿をかつぐ晴れやかな顔で、柄のついた板の上にのせた柩をかついでいた。男の一人は死んだ兄の顔だった。

十人ばかりの男や女はみんな白い着物を着て、二つ折りにして後ろを閉じた白い布を帽子のように被っていた。うつむいた若い女のきつく紅をさした唇は嫁入

りするときの思いつめた結び方だった。

鶴のようにほっそりした姿のよい女で、勝気なきつい眼をして、幾分受け口の豊かな頬は淡路人形の顔だった。娘の万恵子だと思った途端にその女は濃い化粧の下から深い皺をあらわにして祖母の顔になり、お齒黒を覗かせて万有子^{まゆう}を叱った。

「可哀そうに、生きものはみんな命がある。小鳥を捕ったりすると、咽喉に骨を立てて死ぬようなことになる。この仏も若い頃殺生ばかりして、餅がのどにつかえて死んでもうた。ほら、お前の口の中でヒタキがニシャドッチと啼いている」

西はどっちと啼いて首をふり立てていた小鳥を万有子は口に啞えていた。万有子は猫なのであった。

猫の万有子は口にはりついた小鳥の羽を吐き出して藪の中に逃げこみ、赤い実のついた万両の下にうずくまって行列を見守った。

女たちは手に持った小さな鉦を叩き、数珠をつまぐり、男たちは白い袴をつけて、握り拳に数珠をまきつけて雪を踏みしめて歩いている。雪靴をはいている者も、雪下駄をはいている者もいた。子供の手をひいている若い女もいて、子供は祭に出かけるようにはしゃいでいた。

それは不思議にのどかな風景で、数珠をつまぐりながら呟いている読経が、やわらかに降り積った雪の林の小鳥たちの歌声と合奏になった。

野辺送りの行列が白い森に消えると、猫の万有子はまろぶように雪の畦道を突進してその後を追った。

二

とりとめもない夢のことを思いながら、万有子はそれが自分の葬式のような気

もしていた。だが、その夢の中で自分は死んだというわけでもなく、生きていた。どこかで、その葬式を見ていた。猫になっていたような気がする。

死ぬということは多分そういうことなのだという氣もした。

寢床の中でごそごそしていると、泊^{はく}が半分目を醒まして、口の中でぶつぶつ言った。

「へんな夢を見た」

彼に先に語られると万有子は自分の夢を忘れてしまいそうな氣がした。

「人の骨を喰った夢だ」

「誰の」

「さあ……粉に砕いて喰ってしまった。胃の辺りがへんな具合だ」

彼は妙なものを食べて吐く猫の仕草で、首をさしのべて、肩の下をひくひくさせた。そういう恰好をして咽喉に立てた骨を吐き出そうとする猫を、むかし、子供たちが飼っていたことがある。

彼が骨のことを言ったとき、万有子は彼の妻の骨のことを思い出した。粉に碎ける骨とは焼いた骨ではないのか。「誰の」と訊いたとき、彼が「さあ」と言葉を濁らせたのは、妻の骨だったからではあるまいかと、万有子は思った。

彼女は、それを棄てて来るように、うるさく泊に言ったことがあった。

うるさく言われて、彼はそれを食べてしまうことにしたのかもしれない。

「誰の骨を食べたの、誰の？」

彼女は彼の肩をひきつかんでゆさぶった。

「誰のかわからないよ、夢だから。ただ大きな石の上で、丸い石で骨を叩きながら、これは人間の骨だと思っていたよ」

泊は言った。

万有子はそのとき、もう少しで、「あの骨、どこに棄てたの」と言いそうになつて、危く、口を閉じた。

彼は、「ここに」と言つて、自分の胸を指さしそんな気がしたのだ。そして、

そう言ってしまったば、彼はほんとうに、妻の骨を食べてしまったことになるだろう。

彼女は彼の考えている夢のことを忘れさせようとして、ともかくも、自分の夢を創り始めた。

「あたしは、トラの夢を見たのよ。あたしがトラで、トラックに轢かれて死んで、万恵子と麿ちゃん^{まろちゃん}があたしのトラをダンボールの箱に入れて、庭の木犀の木の下に埋めたのよ。そしてお経を読んでくれたわ」

土の中にトラの骨が丸くうずくまっているのが見えた。

トラは昔、泊の息子の麿が飼っていた猫で、万有子の娘の万恵子も自分の猫のように可愛がっていた。シャム猫だったが、わずかに虎猫の血が入っているらしく、陽に透かして見ると薄いベージュのシャム特有の毛並の奥にうっすらと縞が見えた。それでトラという名をつけたらしい。

トラは三年ぐらい生きていたが、トラックに轢かれて死んだ。

三

沌と泊の兄弟は万有子兄妹と同じ年頃で、隣同士の地続きの家に育ったので、幼いときいろいろなことをして遊んだ。

沌がいちばん気に入っていたのはスサノオごっこで、万有子はスサノオの乱暴に困り果てる天照大神や、スサノオが投げ込んだ生き馬の皮に驚いて死んでしまう機織女の役もしなければならなかった。ずっと後になって機織女が梭で陰陰とを突いて死んだという書物の中の言葉に万有子は暗い驚きを感じた。

泊は大抵黒子かヤマタノオロチかスクナヒコナといった役どころで、そのうちそうした遊びには絶対加わらない万有子の兄が、なぜか不機嫌になって文句をつけたのでやめてしまった。

兄は思春期の頃、やたらに文学書を読みふけて、ある日、お宅の御子息がいがわしい妓楼に出入りしているのを御存知かといった投書があり、父は怒って、それを軟弱な文学作品の影響だときめつけ、母が若い頃買い整えた文学全集をおさめてある本箱に鍵をかけさせてしまった。

兄は高等学校の受験の頃、肺結核に罹り、母は万有子にその病気が感染することを怖れて、茨城県の田舎にある家に病人を起居させて、自分も息子の看病のためそちらで過すことが多くなった。戦争で東京の食糧事情はだんだん悪くなっている頃でもあった。

女学校に入ったばかりの万有子は女中と父の三人で暮していたが、ある晩父が女中の部屋に入っていくのを見た。

しばらくするとその女中は海軍の下士官のところに嫁に行くことになり、衣類の買えなくなった時代だったので、母の古い着物などを持って、広島県の方の海軍基地に立って行った。

その結婚式るとき、両親は揃って媒妁人気取りで席に坐り、父は高砂を謡った。その様子を上機嫌で喋っている母を万有子はじっとみつめ、新しい女中の心配をしている母に、もう女中は要らないとそっけなく言った。一度も家事を自分だけの手でとりしきったことのない母は恐怖にかられたような眼でとり散らかされた家の中を見まわし、そうね、非常時なんだし、と呟いた。実際、若い娘は工場に動員されて、食糧事情も日ましに悪くなっていたから、住み込みの女中も見つかりにくくなっていた。母は近所の老夫婦に通いで食事以外の家事を頼み、兄と母のいなくなった家の中で、万有子は父と二人分の食事を作り、父は庭で菜園などつくるようになった。

戦局は日に日に悪くなり、やがて彼女の通っている女学校は閉鎖されて、生徒たちは工場で軍服を縫う仕事をさせられるようになった。

授業もなくなり、帰っても母親の居ない家で、彼女は禁じられていた本を読むようになった。

本箱の鍵はその抽出しの中に入れられていたので、万有子は本箱をあけて、函だけ残して中身を抜きとり、自分の部屋で教科書の下にかくして読んだ。

彼女は新聞を全然読まず、ラジオも聞かず、昔話のような戦前の日本の小説と外国の小説だけ読んで暮した。

彼女の周囲にはそこに書いてあることがらとは全然別のものが動いているように見えた。その動いているものは、彼女を全然生きている気分にしなかった。彼女は日常生活の中では薄ぼんやりした少女に見えた。

病気のだんだん進んだ兄はどうしても東京の家に帰りたいたいと言い出し、帰京して間もなく死んだ。兄の死んだとき、お線香をあげに来た泊が本箱の文学全集を見つけて貸してくれるように頼んだ。彼女は抜きとった中身だけ一冊ずつ窓から庭に立っている泊に渡した。沌と泊の家には少年雑誌と科学の教科書めいた本しかないらしかった。

彼らの家の境の山茶花の生垣は双方の家でつくる菜園のためだんだんと勢いが

なくなつて、結つた竹垣もぐさぐさになり、簡単に人が往き来できるようになつていた。

沌は海兵に入り、江田島に行き、泊も学徒動員で工場勤務になり、製図か何かやらされていた。

終戦のとき、吉祥寺にあった彼らの家は焼け残つた。当時その辺りにはまだ武蔵野の面影が残っていた。

四

「小学校の頃、あなたってよく沌兄さんの告げ口をあたしにしたわね」

万有子は泊に言った。

「どんなことを」

「沌兄さんが夜、お父さんとお母さんの部屋を覗いていて、お父さんが腹を立て、沌兄さんを寄宿舎のある中学に入れてしまったとか」

「それから」

泊は自分も覚えていることを万有子に復唱させた。

「沌兄さんは、子供の頃からお母さんが着更えをするのをじっと見ていたとか」

万有子は死んだ兄が同じようにしていたことを、自分も覚えているような気がしながら言った。そういうとき、母はびしゃりと襖を閉めるのだった。兄が二階の部屋に追い上げられたのは、その頃のことだった。

「スサノオごっこを考えついたのは誰なの」

「兄貴だよ。日支事変が始まって、兄貴はあの頃、剣道を習わせられていただろう。スサノオごっこは剣道の練習になるって言ったんだ」

八岐大蛇になった泊は椅子に縛られた櫛名田姫の万有子のまわりをぐるぐるまわって、彼女の肩や腿に咬みついた。そして酒を飲んでぐうぐう寝るとき、目を